九州天皇家論
3章　神武東征

九州天皇家の誕生

「内木綿のまさき國」

神武天皇の言葉の中に、もう一つ、意味不明の表現がある。「内木綿の眞迮國」である。様々解釈がある。古代韓国語で解明しようとする方もいる。未だ明確ではない。神武天皇は、「内木綿の眞迮國と雖も」と感想を述べている。

> ある人は「内木綿の眞迮國」と云うけれども、実際ここから見てみると、そうではなく、私には「蜻蛉の臀舐め」のように見える

「内木綿の眞迮國」と云ったある人とは神武の身近な人か、或いは土地の人であろう。とにかく、ある人は「内木綿の眞迮國」と云ったけれども、私には「蜻蛉に見える」と云ったのである。では、「内木綿の眞迮國」とはどんな意味なのか。

「内木綿」とは「打つ・湯・布」

「木綿」は普通に解釈してよいであろう。「木綿」とは「コウゾの皮の繊維で作った白い布」（旺文社漢和辞典）である。「木綿」という表記は漢字である。「内木綿」という漢字表記から日本語の「ゆふ」とは訓めない。漢字の「木綿」の表記は中国のものであり、訓みの「ゆふ」は日本のものである。中国と日本と、それぞれの國の言語の成り立ちが異なるからである。

元々、中国には「コウゾの皮の繊維で作った布」があり、それを「木綿」と表記していた。一方、神武の国では「コウゾの布」を「ゆふ」と云っていた。だから、漢字では「木綿」と書き、その訓みは「ゆふ」なのである。

では、「ゆふ」とはどんな意味か。「ゆ」は「湯」、「ふ」は「布（ふ）」ではないだろうか。「由布院」と同じで意味である。「由布」とは「湯布」であろう。「湯布」は「ゆふ」をそのまま漢字表記したものである。

「内（うつ）」とは何か。「内」は「打つ」であろう。理由は「コウゾの布」はコウゾの木皮をまず茹でて、そして叩いて柔らかくして、布に作り上げるからである。

万葉23番歌では「打ち麻」と詠っている。同じく麻も布に仕上げる時、打って麻にしたのであろう。

内木綿とは「打つ・湯・布」である。これは私たちの知る所では「布」と云うより、和紙である。ごわごわした布だったのであろう。

> 豊後風土記・速見郷
>
> 柚富（ゆふ）の郷　此の郷の中に楮の樹多に生ひたり。常に楮の皮を取りて、木綿を造る。因りて柚富の郷といふ

この「豊後國の速見郷」とは北九州市・貫・曽根である。ここは「コウゾ」の特産地だった。「柚富（木綿）」は、日常の生活用品であった。『内木綿のように見える』と言った人は特別なしゃれた表現をしたという訳でなく、日常会話の一つとして言ったに過ぎなかったのであろう。

「真さき」は「狭い」である（文学大系・頭注）。「内木綿の真さき國」の意味は「コウゾの皮を茹でて打って作った白い布のように狭い國」である。

「内木綿」とは竹馬川の流れ

神武天皇は「蜻蛉の胴」を連想し、ある人は「狭い白い布」を連想した。「トンボの交尾」にも見え、また、「狭い白い布」にも見えたものは竹馬川の流れである。神武天皇もある人も、竹馬川を見てそれぞれの感想を述べた。

神武は竹馬川の流れを見て「蜻蛉の臀舐め」と感想を持ったが、ある人は竹馬川の流れを「内木綿」と表現していたのである。神武天皇が「蜻蛉の交尾」を連想し、ある人が「白い布」を連想した竹馬川は確かにそのような特徴ある流れをしている。どちらがよりよくこの川の姿を捉えているか。人の感じ方は見た場所や見た時間にもよるであろう。或いはその時の自分の「心理」によっても異なるであろう。ある人が見たその時、川は朝日に白く輝いていたのであろう。川が白い布」ように見えたと云っても不思議ではない。

神武が見た時は夏四月。川は、青く、トンボの胴体のように見えたのであろう。奇妙に曲がる竹馬川の流れ見て「交尾する蜻蛉の胴」と感想を持ってもこれまた自然な感想というべきであろう。

神武が「秋津州」と云い、伊弉諾尊が「日本は浦安の國」「細戈の千足る國」と云い、饒速日命が「虚空見つ日本の國」と云い、大国主命が「玉垣の内つ國」と表現した國は小倉南区である。

小倉南区は「伊弉諾尊」、「大国主命」、「神武」と続く歴代の栄光の國だったのである。神武が東征にあたって自らの國を「西の偏」と云ったのも当然だった。繁栄していたのは「東の美き地（小倉南区）」だった。そこから見れば、神武が居た小倉北区は確かに「西の偏の國」である。

神武はこれら栄光の始祖が築いた國、伝統の國を手に入れたことを、終生、誇りとしたのである。

神武九州天皇家の国々
吉備
筑紫
阿岐國
淡道之穂之狭別嶋
日向
浪速の海
狭井河
神武
倭（やまと）國
天香具山
0
10km